

までもなく知床が、

「世界自然遺産」に指定されるであろうといわれはじめた年、
ルシヤ川へ通う特別の許可を得ました。

知床半島の中ほどにあるルシヤ川のまわりは、

「ヒクマの王国」といわれ、

友から何度も撮影にさそわれていましたが、

わたしは、臆病な人間です。

あんな恐ろしい生き物とは会いたくないと思い、

「そのうちに……」と逃げていました。

しかし世界遺産となれば、

関係者以外はまず入れなくなり、

「そのうち……」がなくなると気づいたのです。

Alicen

ヒクマ

竹田津実

文 写真

アリス館

出かけてみて、その地の変化にびっくりしました。40年以上前、わたしはオジロワシを見たい一心で、知床へ入りました。そのとき、道は背の高いオオイトドリの葉がおおいかぶさってトンネルのようになり、すぐそばのオホーツク海も、波音が聞こえるだけでした。

ところが今は、海岸まで見わたせます。風景を変えたのは、この間に増えたエゾシカです。彼らがイタドリをすっかり食べってしまったのでした。

ルシャ川に着くと、道路のわきに、黒くろとしたヒグマのウンチを発見。

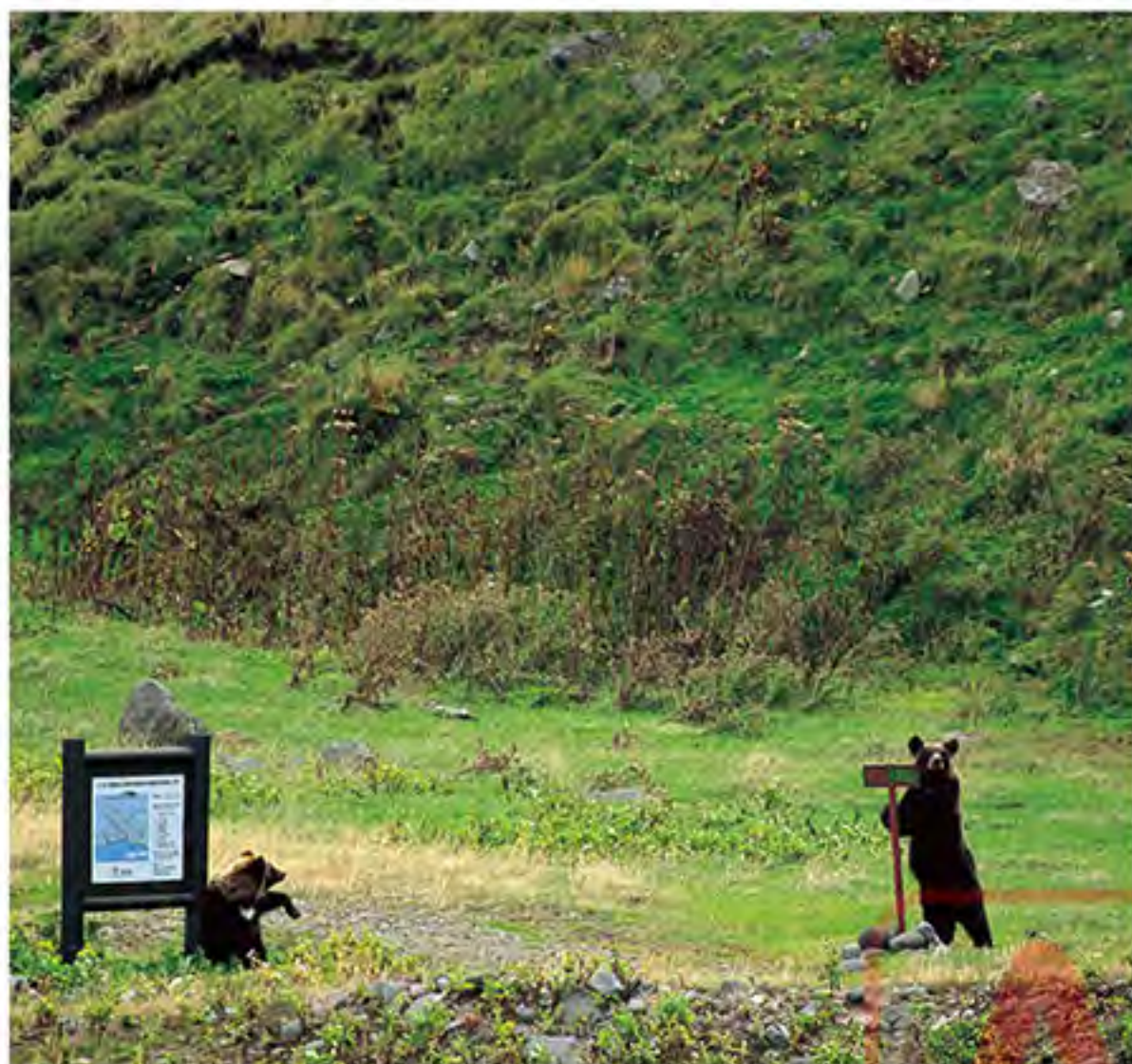
「ここはおれたちの地だ」と宣告しています。



北海道が豊かな自然を今でも残しているのは、ヒグマとヤブ蚊の力だと、わたしは信じてきました。もしヒグマの恐怖や、無数のヤブ蚊のしつような攻撃がなかったら、わたしたちはもっとずかすかと森の奥まで入っていたでしょう。ヒグマは、北の自然の守護神である、と確信しています。

初日には、2頭の子どもをつれた母グマが、出むかえてくれました。ふしぎなことに、車の中にいるわたしを、ヒグマはちつとも警戒していませんでした。





半島で一番大きな川、ルシャ川は、サケやマスのふるさとで、毎年たくさんの数が帰ってきます。そのとき、ルシャ川は半島一のヒグマの食堂になります。人間もそれに参加させてもらって、サケやマスをとり、卵から稚魚をかねて海に放す、という孵化場をつくりました。

わたしが使う道路は、その孵化場へいくためにつくられたものです。

しかしヒグマにとっては、道路も孵化場も、大きな岩が転がってきてできたもの、くらいにしか考えていないと思います。すべてが知床の大自然の一部でした。

そこには、それがあたり前の日常がありました。

わたしも例外ではありません。
車は倒木などと同じで、自然の物であると思っています。その中にいる人間は、車の一部と考えているようです。

あるとき、つかれて車の中でうとうとしていると、大きな地震がありました。車がゆらゆらとゆれたのです。でもあまり長いのでおかしいと気づき、バックミラーをのぞいてみたら、ヒグマの若者が背中を後輪で搔いているではありませんか。

ごしごしと。

そのたびに車はゆらゆら、わたしもゆらゆら。

軽くクラクションを鳴らすと、止めました。そして、ゆっくりはなれていったのです。





その年、6月から10月のはじめまでに、ルシャ川のまわりで見かけたクマの数は、20頭でした。4組の母子、2組の兄弟、単独で行動している4頭です。母子も、子ども3頭のものから1頭のものまで、いろいろです。ヒグマには用心深いものもありますが、ここには、人間とヒグマのおだやかな関係の歴史があるらしく、わたしたち人間を警戒することはほとんどありませんでした。むしろ平気で近づくのでこまっでしてしまうことのほうが多いくらいです。

漁師のおやじさんが「おい、いいかげんにするんだ!!」と、寝泊まりする番屋に近づきすぎる若いクマに、説教をしていました。

ゆったりとした、わたしの好きな風景でした。

わたしはその年、一番はじめに出会った母子を追うことにしました。ヒグマとの初対面だったので、終日どきどきしてすごし、つぎの日からも、気がつくとその母子をずっと探していました。